

48 肝 膿 瘍

担当	検 査 チ ャ ー ト
家畜保健衛生所	<pre> graph TD A["(1) 疫学調査"] --- B["(2) 臨床検査"] A --- B B -- "(と畜)" --> C["(3) 剖検"] C -- "(膿汁)" --> D["(4) 簡易細菌検査
<直接鏡検>"] </pre>
病性鑑定施設	<pre> graph TD D -- "<分離培養>" --> E["(5) 細菌培養試験"] E --> F["(6) 細菌性状分析"] F --> G["(+)"] F --> H["(-)"] </pre>
判定・結果	<p style="text-align: center;">(+)</p> <p style="text-align: center;">(-)</p>
最終判定	<p>疫学調査、臨床検査の結果を基に、細菌培養試験や細菌性状分析の結果を併せて総合的に判断する。</p>
その他	<p>本病は生体で検査することが不可能であるため、と畜場で発見された時点でその材料から病因菌を検索する。</p>

→類似疾病検査

牛トウルエペレラ(アルカノバクテリウム)・ピオゲネス感染症

○ 病原体: *Fusobacterium necrophorum*

(1) 疫学調査

- ① 濃厚飼料多給の肥育牛、特に乳用雄肥育牛に好発する。
- ② 多頭飼育の農場に発生する。

(2) 臨床検査

- ① 特徴的な症状を認めない。
- ② 腐蹄病がみられることがある。

(3) 剖検(ほとんどの場合と畜場で摘発)

- ① 肝臓表面に小豆大～小児頭大の膿瘍の形成
- ② 亜急性期には黄白色、乾燥感をもって隆起、菊花状の紋様を呈し、薄い肉芽組織で覆われる。
- ③ 経過の長いものは膿瘍膜により健常部との境界が明瞭となる。

(4) 簡易細菌検査(直接鏡検)

膿汁の直接塗抹標本をグラム染色およびギムザ染色によりグラム陰性の桿菌または菌体内顆粒(鉄道路線記号の模様)を確認する。

(5) 細菌培養試験(分離培養)

- ① 膿汁を使用し、血液加嫌気性菌用寒天培地(GAM 培地)および選択培地(変法 FM 培地)を用いて嫌気ジャー法で分離培養を行う。
37℃で3日間培養する。
- ② β溶血性の灰白色集落を形成する。

(6) 細菌性状分析

グラム染色(-)、紡錘形桿菌、多形性、運動性(-)、芽胞(-)、インドール産生(+)、H₂S産生(+)、硝酸塩還元(-)、リパーゼ(+)、グルコース(-または弱+)

(参考文献)

・鹿江雅光: 獣医伝染病学(清水悠紀臣ら編)、第4版、57-58、近代出版、東京(1995)。